5 昭和58年災害

未曾有の降雨により山崩れ、がけ崩れが多発し、これによる犠牲者が死者・行方不明者の8割を占めた。特に、河川の氾濫を警戒して、山手や高台に避難した人々が山崩れに巻き込まれ犠牲が大きくなった。この災害以後、住民の自主防災組織が誕生し、また、県としてもハード整備のみならず、ソフト対策にも力を入れるようになるなど、ソフト対策が大きく意識されるきっかけとなった。

(1)気象状況

■7月19日

梅雨前線は、本州の南海上まで南下し一時活動が弱まったが、中国大陸から東進してきた低気圧の接近に伴い急速に北上をはじめた。

■7月20日

低気圧が日本海中部を東進するに伴い、この梅雨前線は山陰沿岸まで南下し、再び活動が活発となった。これに対し、11時10分隠岐地方に強風波浪注意報が、15時30分に県東・西部に対して大雨洪水雷雨波浪注意報が発表され、隠岐地方に対しては、22時45分、大雨・雷雨・波浪注意報が発表された。日雨量は、県中・東部で30～50㎜、吾妻山で105㎜であった。

■7月21日

低気圧は日本海の北東部に進み、梅雨前線は南下して中国地方の瀬戸内側に停滞した。5時、県東・西部に対して、大雨・洪水警報、雷雨波浪注意報が発表された。降水量は県西部で早朝と夜半前の時間帯に多く、日雨量は100～200㎜であった。

以降24日まで、気象変化に対応し、梅雨前線の活動状況と各種実況値、レーダー資料、予測資料図、予測計測値等を使用して解析を行い、大雨・洪水警報及び注意報、強風・波浪・雷雨注意報の発表と、18回に及ぶ大雨に関する情報の発表が行われた。

■7月22日

梅雨前線は北上して山陰沖に停滞し、日中は小康状態となった。しかし、低気圧が山陰沖の梅雨前線上を能登半島に向かって進んでおり、これに関連して、島根県の北西海上に高さ8～9㎞の強い雨雲が現れ、北東から南西にのびる帯状となり東へ70㎞/hで進んでいた。これにより、まず県東部で雨がやや強くなり、時間雨量は10～20㎜であった。さらに、2～3時間遅れて県西部でも雨が降り始め、次第に強くなっていった。日雨量は、県東部で30～100㎜、西部で5～30㎜であった。

■7月23日

低気圧が能登半島方面にあり、これを通る梅雨前線の活動は活発で、西の方から南下を始めた。夜半から夜明前にかけて雨雲は急激な変化と強まりを増し、東北東から西南西にのびて島根県全域を覆い、東南東に移動した。朝方には中国山地上空に停滞気味となり、強い雨雲の部分は県西部にかかった。雨は0時頃から県西部の平野部で急速に強まって大雨となり、0時35分に県東・西部に対し大雨洪水警報が発令された。1時頃から3時にかけて、桜江町、浜田市、川本町方面で時間雨量50～70㎜の強い雨を記録し、次いで4時頃から9時頃にかけて、浜田市、三隅町、弥栄村、益田市方面で時間雨量40～90㎜の強い雨を記録した。この2度の強雨によって、県西部を中心に、先行降雨と相俟って、洪水、山崩れ、がけ崩れ、土砂流による甚大な被害が発生した。その後、降雨は次第におさまり、西部では昼前に、東部では夜に入りやんだ。

■7月24日

梅雨前線は、太平洋高気圧の勢力強化に伴い日本海南部に北上し、明け方にかけて隠岐地方で10～60㎜の降雨があったほかは特に降雨はなく、本土側では時々晴れるようになり、夏らしい天候になってきた。

雨量観測表

(日界：24時)　　単位：mm

観測地	7月20日	7月21日	7月22日	7月23日	7月24日	合計
西　郷	30	6	98	—	61	195
海　士	27	4	111	1	14	157
鹿　島	38	44	108	33	5	228
松　江	28	50	91	39	1	209
出　雲	41	50	93	28	—	212
大　栗	43	34	70	32	—	179
伯　太	24	39	46	46	—	155
佐　田	59	68	76	56	1	260
大　田	59	63	85	29	—	236
掛　合	42	70	57	69	—	238
横　田	33	74	32	92	—	231
福　光	25	70	60	95	—	250
赤　名	73	143	29	192	—	437
吾妻山	105	144	32	124	—	405
桜　江	46	141	27	276	—	490
川　本	54	148	32	241	—	475
浜　田	33	134	25	330	—	522
原　山	28	123	9	289	4	453
瑞　穂	47	155	7	252	—	461
三　隅	42	194	24	×	×	×(流失)
弥　栄	42	212	23	278	—	555
波　佐	41	222	12	333	—	608
益　田	33	154	14	×	×	×(水没)
匹　見	32	138	1	110	3	284
十種峯	39	97	6	27	—	169
津和野	23	87	4	19	—	133
六日市	18	61	1	3	1	84

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

河川の水位状況（県管理河川）

河川名	観測所	日	時	最高水位(m)	警戒水位(m)
大馬木川	車　橋	23	5	2.50	2.40
神戸川	佐　田	23	8	3.97	2.95
神戸川	乙立橋	23	9	3.05	2.00
神戸川	馬　木	23	10	4.90	3.50
平田船川	船　橋	23	20	1.26	1.00
新道川	荘　原	22	7	1.55	1.20
出羽川	下口羽	23	5	3.00	2.50
早水川	粕　淵	23	5	1.50	1.50
潟　川	因　原	23	14	5.80	4.00
八戸川	市　木	23	5	2.20	1.10
八戸川	川　戸	23	16	10.90	4.20
敬　川	敬川橋	23	5	4.00	3.00
下府川	土穴橋	23	不明	不明	2.50
周布川	周府大橋	23	不明	不明	2.70
三隅川	三隅大橋	23	6	7.20	3.00
浜田川	浜田大橋	23	11	2.89	1.60
匹見川	昭和橋	21	8	3.30	3.00
白上川	落合橋	23	6	4.60	3.00
益田川	新　橋	23	7	(5.10)	2.50
蟇栖川	五箇大橋	22	10	1.80	1.70
郷万川	西新橋	22	10	1.50	1.50
八尾川	八郎橋	24	5	2.80	2.00

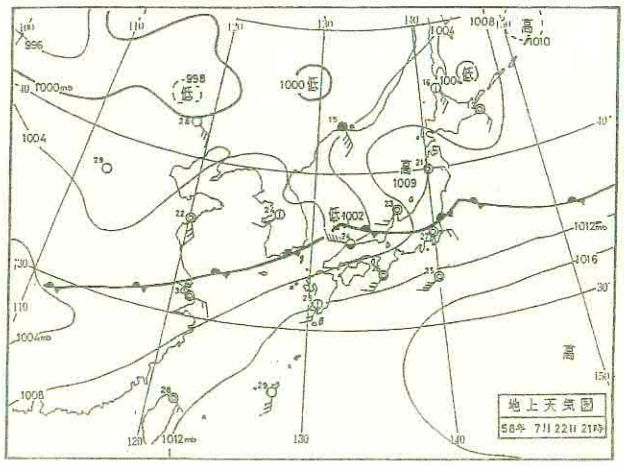
出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

河川の水位状況（建設省管理河川）

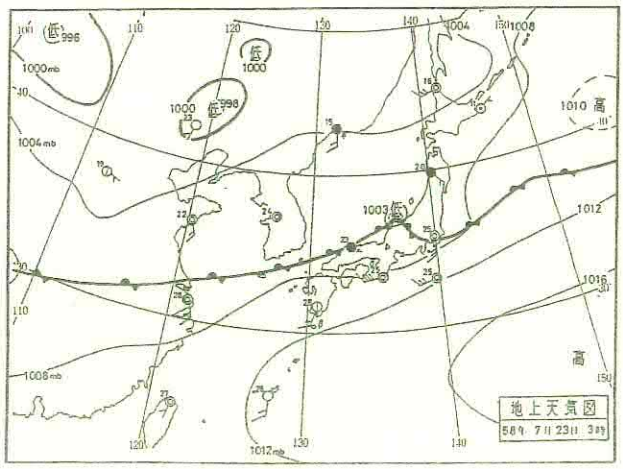
河川名	観測所	日	時	最高水位(m)	警戒水位(m)
江の川	尾関山	23	11	10.08	8.00
江の川	都　賀	23	12	9.12	5.40
江の川	川　本	23	14	12.57	6.00
江の川	谷住郷	23	15、16	15.78	7.70
江の川	川　平	23	16	14.35	8.40
高津川	高　角	23	9	4.20	3.10
高津川	神　田	23	8	2.55	3.30
斐伊川	木　次	23	8	3.30	3.50
斐伊川	大　津	23	10	2.05	2.50
斐伊川	源光寺橋	23	13	3.65	2.80
斐伊川	松江大橋川	23	13	1.14	1.20
斐伊川	中海湖心	23	13	0.59	0.90

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

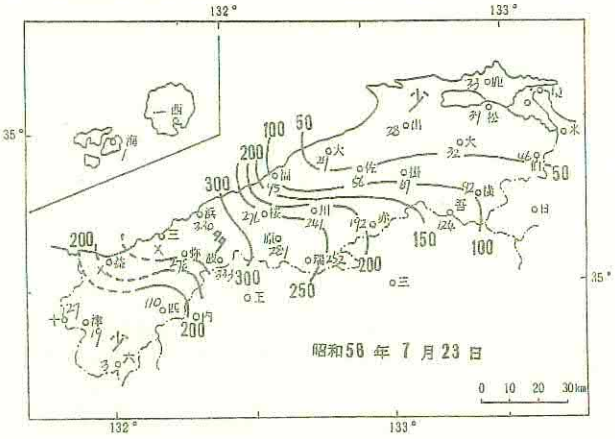
地上天気図（昭和58年7月22日21時）



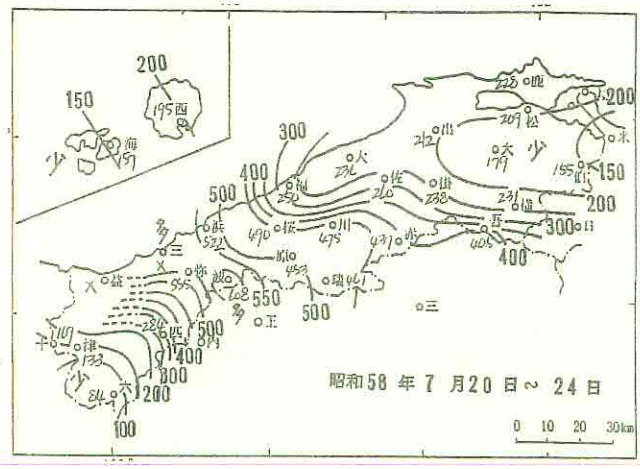
地上天気図（昭和58年7月23日3時）



雨量分布図（昭和58年7月23日0時～23日24時）



雨量分布図（昭和58年7月20日 0時～23日24時）

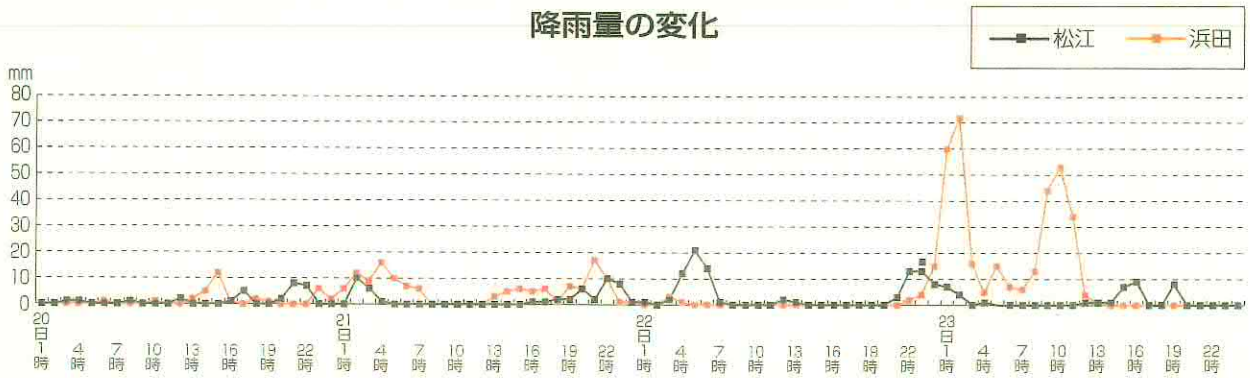


気象官署極値表（昭和58年7月）

		松江地方気象台		浜田測候所		西郷測候所	
		観測値	起時	観測値	起時	観測値	起時
風	最大風速	WSW 11.6m/s	22日11時10分	SW 12.7m/s	22日20時20分	SW 10.8m/s	20日17時00分
風	最大瞬間風速	WSW 19.1m/s	21日01時20分	SW 19.8m/s	22日18時50分	SW 19.4m/s	20日12時10分
雨	総降水量	208.0mm	20日00時10分から 23日23時50分まで	521.5mm	19日21時20分から 23日15時20分まで	195.0mm	20日00時00分から 24日06時12分まで
雨	日降水量の最大値	90.5mm	22日	331.5mm	23日	97.5mm	22日
雨	1時間降水量の最大値	26.0mm	22日04時40分まで	91.0mm	23日01時40分まで	28.5mm	24日03時50分まで
雨	10分間降水量の最大値	7.5mm	21日21時40分まで	20.0mm	23日01時40分まで	12.0mm	24日03時10分まで

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

降雨量の変化



出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

(2) 被害状況

7月20日から降り始めた雨は、21日夜までに県西部を中心に多いところでは200～260㎜に達し、河川は増水し土砂は崩れやすい状態となっていた。この先行降雨に続き、22日夜から23日早朝にかけて、250㎜～300㎜に達する降雨があり、浜田では測候所開設以来の時間雨量91㎜を記録し、連続雨量は500㎜を超える局地的な豪雨となった。これによって、多くの尊い人命を失うとともに、甚大な被害が発生した。

三隅川、益田川、周布川等中小河川では堤防の決壊が相次ぎ濁流が住宅地に流れ込み、多くの家屋の流失や床上・床下浸水等の被害が発生した。大規模な山崩れやがけ崩れが続発し、これによる家屋の倒壊で多数の死傷者がでた。また国鉄山陰本線、国道9号などの鉄道網や道路網もマヒ状態となり、被災地では外部との通信が途絶えたため多くの市町村で孤立地区がでた。

この災害による総被害額は約3,661億円の巨額に達した。このうち、土木関係被害と農林水産関係被害が全体の7割近くを占めている。被害額の内訳としては、土木関係被害が約1,291億円で35.27%、農林水産関係被害が約1,265億円で34.56%、さらに商工業関係被害が約559億円で15.28%となっている。

■人的被害及び家屋被害

人的被害は266名に達し、このうち死者・行方不明者は半数近くの107名であった。これを原因別にみると、山崩れ、がけ崩れによる倒壊家屋の下敷きとなったり、崩土の生き埋めによるものが91名と全体の85%を占め、続いて濁流に流されて水死したものが11名と続いている。また、地域別にみると、特に被害が激甚であった浜田市、益田市、三隅町の3市町だけで、人的被害は204名にのぼり、全体の76.7%を占めるに至っている。3市町の死者・行方不明者に関しては、実に87名、全体の81.3%に及んでいる。

この災害での人的被害の特徴は、過去に崩れたことのないところで相次いで山崩れが発生したこと、河川の氾濫を警戒して、山手や高台に避難した人々が、山崩れにまきこまれ犠牲となったことである。

家屋被害については、河川の氾濫や山崩れ、がけ崩れによって各地で家屋の流失、倒壊、浸水等が続出した。住家被害は17,600棟、被災者は31,697名に及んでいる。特に三隅町及び益田市では、三隅川及び益田川の堤防が決壊したことにより、家屋に何らかの被害を受けた世帯は、それぞれ全世帯数（昭和55年10月1日　国勢調査）の60%及び46%と壊滅的な被害であった。

人的被害状況

（県警調べ）

	死亡	死亡原因					行方不明	重傷	原因内訳			軽傷	計
		山崖崩れ		水死		その他			山崖崩れによる家屋倒壊	山崖崩れに巻き込まれ	川に転落流され		
		家屋の倒壊	土砂	避難途中	その他								
浜田市	22	22	—	—	—	—	—	4	4	—	—	13	39
益田市	31	24	4	1	2	—	1	19	18	1	—	48	99
江津市	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	4	5
三隅町	33	21	6	—	5	1	—	21	20	—	1	12	66
金城町	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	5	6
弥栄村	2	2	—	—	—	—	—	5	5	—	—	4	11
川本町	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	4
桜江町	1	1	—	—	—	—	3	4	3	—	1	5	13
瑞穂町	2	—	—	—	2	—	—	1	—	1	—	—	3
大和村	—	—	—	—	—	—	—	2	1	—	1	3	5
羽須美村	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
美都町	8	8	—	—	—	—	—	4	4	—	—	—	12
匹見町	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
小計	103	81	10	1	10	1	4	61	56	2	3	98	266
合計	103	91				12	4	61				98	
比率(%)	100.0	88.3				11.7			91.8	3.3	4.9	100.0	

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

総被害額

項目	内訳	被害額（千円）	比率（%）
土木関係	河川	68,723,791	
	道路	39,612,730	
	橋梁	4,726,890	
	砂防	15,228,300	
	公園・都市施設等	629,906	
	港湾	196,000	
	小計	129,117,617	35.27
住家等家屋関係	住家被害	31,774,590	
	民有非住家被害	3,094,854	
	小計	34,869,444	9.52
商工業関係	商業	35,224,908	
	工業	15,528,003	
	その他	5,170,254	
	小計	55,923,165	15.28
農林水産関係	農業関係	44,111,704	
	林業関係	82,071,903	
	水産業関係	351,476	
	小計	126,535,083	34.56
福祉医療関係	社会福祉施設	419,283	
	医療施設	485,370	
	環境衛生施設	790,455	
	小計	1,695,108	0.46
交通及び通信関係	鉄道	6,412,459	
	国鉄バス	27,680	
	民営バス	250,000	
	通信施設	3,500,000	
	小計	10,190,139	2.78
電気水道及びガス施設	電力施設	2,060,000	
	水道施設	1,235,575	
	ガス施設	19,260	
	小計	3,314,835	0.91
文教施設関係	公立学校	1,707,272	
	私立学校	724,450	
	社会教育・体育施設・文化財等	205,747	
	小計	2,637,469	0.72
自然公園及び自然歩道施設		60,687	0.02
公営住宅関係	県営住宅	51,922	
	市町村営住宅	14,932	
	小計	66,854	0.02
警察施設関係		150,588	0.04
その他公用及び公共施設関係		1,545,314	0.42
合計		366,106,303	100.00

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

水没した三隅町（那賀郡三隅町）

水が引いた後の三隅町役場の散乱状態

15名の死者がでた穂出町の地すべり
（浜田市）

土石流に襲われた家屋（益田市）

水没した益田市街地（益田市）

■命を救った無線放送

昭和58年災害は、県西部を襲った集中豪雨であったが、なかでも大きな被害を受けたのが、那賀郡三隅町であった。町を流れる三隅川の堤防決壊や至る所での土砂崩れ等によって、総被害額700億円以上の激甚な被害を受け、町はまさに壊滅状態となった。

この災害時に、役場から町民への避難を呼びかける手段として活躍し、多くの町民の命を救ったのが無線放送であった。それまで三隅町では、役場から町民への連絡には有線放送を用いていた。ところがこの有線放送に関しては、修繕に費用がかかる上に、役場職員が常時2名維持管理にあたらねばならないことなどから、行政的にも財政的にもかなり負担になっていた。そこで、このような無駄をなくそうと色々検討した結果、維持費が少なく便利であることから、無線放送が取り付けられることとなった。無線放送は、無線同士で話をすることはできないが、その代わり有線の様に話し中になることはないため、どんなときでも大切な情報をすぐに住民に知らせることができる。町はこの計画を積極的に進め、ちょうどこの大災害の前年の12月、全家庭に無線を設置したのである。

そして、この大災害が発生した。町では各種警報・注意報が出されるたびに、役場1階にあった無線基地から住民に注意・警戒を呼びかけた。7月22日22時から降り出した雨は一向に衰える気配をみせず降り続き、23日5時頃、とうとう「非常事態宣言」の発令に至った。非常事態宣言は、3回にわたり無線放送で全町民に向けて放送され、一刻も早い避難を呼びかけた。

6時近くになると、三隅川は警戒水位をはるかに超えたため、三隅川付近の地区に向かってさらに強く避難を呼びかけた。この放送は、地区の全員が避難を終える7時頃まで続けられた。

7時頃、役場庁舎がとうとう浸水し、無線基地もみるみるうちに浸水しはじめた。7時半頃浸水の最中で、避難を呼びかける最後の放送が行われた。「今まさに役場は浸水しており、まもなくこの放送もできなくなります。住民の皆さんは十分警戒して下さい」という最後の呼びかけが終わると同時に無線放送の電源が切れた。

こうした必死の呼びかけに対して、役場に約450人、神社へ約200人など、各所に避難の人々が集まった。放送が終わった直後、三隅川の堤防が決壊し、町は濁流にのみこまれた。もし、避難が遅れていれば、その被害は想像を絶するものになっていただろう。また、もしも「有線」であったならば、線がある以上その線に何らかの支障がでれば、そこで放送・受信は不可能になってしまう。「無線」であったからこそ、最後の最後まで住民への避難の呼びかけができたのである。偶然に有線放送を無線放送に切り替えたことが、多くの住民の命を救うことになったのである。その後、この無線基地は役場の4階に移され、現在も活躍を続けている。

しかし一方で、この災害により町の海沿いの集落では、多くの方が土砂災害の被害にあって亡くなっている。無線放送での呼びかけに対して、川の近くの人々は、川が増水し危険度が高まっていく様を目の当たりにすることから速やかに避難を行ったが、海沿いでは危険が見えにくいため避難が遅れ、家の後ろの山が崩れて多くの人がその犠牲となった。

災害をきっかけにして、三隅町では町民に強い防災意識が芽ばえている。ある集落では、毎月2回の防災訓練の実施や、雨期に入る前には高台に天幕をはって避難所設置などを行なっている。このように、各集落が自主的に防災活動を実施し、このような悲惨な被害を二度と出さないための努力を重ねているのである。

土砂災害に襲われた三隅町須津地区

避難の呼びかけに活躍した無線放送基地

■土木関係被害

7月20日から7月23日にかけて、県西部の3市10町村は局地的な集中豪雨に襲われ、中小河川は氾濫し、堤防、道路、橋梁等の決壊や流失が相次いだ。土木関係被害は激甚なものとなり、砂防施設も737ヵ所が被害を受けた。

土木関係被害概況

区分	国関係		県関係		市町村関係		計	
	箇所数	被害額（千円）	箇所数	被害額（千円）	箇所数	被害額（千円）	箇所数	被害額（千円）
河川	51	2,270,000	3,565	44,473,770	3,021	21,980,021	6,637	68,723,791
道路	158	1,780,400	2,317	16,054,280	7,053	21,778,050	9,528	39,612,730
橋梁	6	341,600	23	1,180,530	161	3,204,760	190	4,726,890
砂防	—	—	737	15,228,300	—	—	737	15,228,300
公園、都市施設等	—	—	10	56,496	73	573,410	83	629,906
港湾、空港	—	—	11	196,000	—	—	11	196,000
計	215	4,392,000	6,663	77,189,376	10,308	47,536,241	17,186	129,117,617

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

渓流施設の被害状況

水系名		箇所数	被害額（千円）
一級水系	斐伊川	14	182,305
	江の川	143	2,016,730
	高津川	43	155,215
計		200	2,354,250
二級水系	神戸川	3	3,680
	福光川	1	8,600
	下府川	14	43,620
	浜田川	18	60,700
	周府川	93	870,530
	三隅川	163	4,537,180
	沖田川	23	345,200
	津田川	4	59,600
	遠田川	2	9,400
	青川	6	360,700
	益田川	141	4,790,570
	喜阿弥川	2	65,430
	二見川	3	12,820
	飯浦川	29	267,480
計		502	11,435,510
その他水系	久村川	1	6,000
	折居川	12	1,360,410
	福井掛川	7	38,530
	戸田川	13	29,700
	井尻川	1	2,500
	菱川	1	1,400
計		35	1,438,540
合計		737	15,228,300

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

氾濫する出羽川（邑智郡瑞穂町）

土石流に襲われた三隅神社（那賀郡三隅町）

土砂災害による被害状況

上段：土石流　中段：地すべり　下段：急傾斜地

市町村名	箇所数		人的被害 死者		行方不明		負傷者		合計		住宅被害 全壊		半壊		一部破損		合計	
		計		計		計		計		計		計		計		計		計
川本町	9	21	—	3	—	—	—	—	—	3	—	1	1	3	1	6	2	10
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	12		3		—		—		3		1		2		5		8	
邑智町	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
大和村	2	12	—	—	—	—	—	1	—	1	—	2	—	2	3	10	3	14
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	10		—		—		1		1		2		2		7		11	
羽須美村	11	19	—	—	—	—	1	2	1	2	2	5	4	6	9	16	15	27
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	8		—		—		1		1		3		2		7		12	
瑞穂町	5	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	4	6	1	5	5	13
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	8		—		—		—		—		2		2		4		8	
石見町	1	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	—	4	—	15	—	24
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	21		—		—		—		—		5		4		15		24	
桜江町	25	42	—	1	—	—	3	5	3	6	2	6	7	12	15	31	24	49
	1		1		—		—		1		2		—		—		2	
	16		—		—		2		2		2		5		16		23	
浜田市	28	193	—	22	—	—	1	9	1	31	2	56	9	54	14	131	25	241
	1		15		—		1		16		8		—		—		8	
	164		7		—		7		14		46		45		117		208	
江津市	3	12	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2	2	4	—	6	3	12
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	9		—		—		—		—		1		2		6		9	
金城町	12	24	—	—	—	—	—	5	—	5	—	4	—	4	5	10	5	18
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	12		—		—		5		5		4		4		5		13	
旭町	9	24	—	—	—	—	—	—	—	—	2	3	2	6	11	22	15	31
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	15		—		—		—		—		1		4		11		16	
弥栄村	8	44	—	2	—	—	2	8	2	10	7	16	2	13	8	29	17	58
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	36		2		—		6		8		9		11		21		41	
三隅町	83	205	4	28	—	—	2	13	6	41	45	139	39	81	50	92	134	312
	2		1		—		—		1		2		—		4		6	
	120		23		—		11		34		92		42		38		172	
益田市	54	337	1	23	—	—	9	38	10	61	12	163	26	105	100	271	138	539
	3		—		—		—		—		3		2		2		7	
	280		22		—		29		51		148		77		169		394	
美都町	27	89	—	8	—	—	—	4	—	12	9	35	1	12	12	43	22	90
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	62		8		—		4		12		26		11		31		68	
匹見町	5	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	7	5	7
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	1		—		—		—		—		—		—		2		2	
出雲市	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	3
	—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	1		—		—		—		—		3		—		—		3	
合計 土石流	285	1,067	5	87	—	—	18	85	23	172	82	442	97	312	234	694	413	1,448
合計 地すべり	7		17		—		1		18		15		2		6		23	
合計 急傾斜地	775		65		—		66		131		345		213		454		1,012	

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

■災害救助の状況

7月22日夜半から一層強まった豪雨は、県西部を中心として県下全域に被害をもたらした。7月23日0時35分大雨洪水警報が発令され、県は早朝から関係職員を非常招集し、情報収集に努めた。23日8時、この災害が相当な規模になると判断した県本庁は災害対策本部を設置し、各機関と緊密な連携を取って救助活動に入った。

9時30分、桜江町及び羽須美村の被害が災害救助法の基準に達したため、直ちに災害救助法が適用された。次いで、益田市、三隅町、弥栄村、浜田市、石見町、江津市、川本町、旭町、瑞穂町、金城町、美都町など、同日23時までに13市町村に対し、同法が適用されることとなった。

この災害では、交通・通信が各所で途絶し、情報収集をはじめ救援物資の輸送等において非常に困難を極めた。三隅町では役場周辺が浸水し、益田市街地は一時完全に交通が途絶した。県西部の山間部において孤立地区が数十ヵ所判明するなどの困難な状況のなか、関係者各位により必死の救助活動が行われた。

県警機動隊による救出活動

避難所設置及び収容状況

市町村名	設置数（箇所）	開設期間	収容延人員（人）
浜田市	15	7.23～8. 5	3,127
益田市	77	7.23～8.12	17,360
江津市	42	7.23～7.29	1,479
川本町	10	7.23～7.29	810
羽須美村	9	7.23～7.25	105
瑞穂町	11	7.23～7.24	205
石見町	58	7.23～7.29	764
桜江町	55	7.23～8. 5	6,845
金城町	4	7.23～7.28	299
旭町	5	7.23～7.25	191
弥栄町	20	7.23～8.10	1,394
三隅町	34	7.23～8.19	34,470
美都町	41	7.23～8. 5	2,488
計	381		69,537

出典：「昭和58年7月豪雨災害の記録」

■タンク車での救援活動

昭和58年災害は県西部を襲った集中豪雨であり、各市町村の被害は筆舌に尽くしがたいものであった。しかし、ここにあって一つだけ全く被害を受けなかった町がある。それが山口県との県境にある鹿足郡六日市町である。当時、この六日市町役場にて、災害支援にあたった人の話を以下に紹介する。

「災害当日、本町は雨が全く降っておらず、益田市が集中豪雨の被害を受けてひどい有様であるという連絡を受けて大変驚いた。

夕方、被害を受けた益田市から飲料水の支援を要請する連絡が入った。そこでできるだけ大量の水を運ぶために消防のタンク車を用意し、さらに、近くの道路公団の新品の散水車を借りようと思い公団事務所に連絡した。ところが事務所は、広島の管理事務所に了解を取らなければ貸し出しできないと言うので、災害時にそんな悠長なことは言っていられないと怒って電話を切ったところ、その後すぐ、公団事務所から運転手付きでタンクを出させていただきますという連絡が入った。

こうして、消防車と散水車で益田市の横田に向かった。夜になってようやく市役所に到着すると、市役所は停電しており、階段の手すりにずらっとろうそくが並べられ明かりが灯されていた。市長室に入って水を持ってきたことを告げると、市長は深々と頭を下げお礼を言われた。その後、スポーツ公園にて水を配給した。たくさんの人がバケツをもってずらっと並ばれ、その人達に水を分けることができた。」

このように災害時には、特に町と町、人と人との助け合いが大きな力となるのであろう。